書の索引を卷尾に附せる等、當に本書の閲讀に際して理解を助けるのみならず、この種の研究者にとつても多大の利便を與へるに相違ない。

印刷の歴史の如く支那文化の影響を蒙ること多いものの研究に、支那の事情に通じ、日支交通に詳しい著者の如きを得たるは眞に適材適所と云ふべきであらう。

嘗て日支交通史の著作に示された克明な努力と綜合的才能に今又接し得たるを悅び、更に江戸時代中後期に於ける印刷の發達に迄論及し日本印刷文化史を完了せらるる日の近きを祈る次第である。(菊版、七三五頁、定價四圓東京、富山房。)〔吉田〕

●日本神話の研究　　松本　信廣著

日本神話の研究は必しも現代に始まつたものではない神話傳誦の一面には必ずその解釋と研究とを含んでゐたと思はれるが、その樣な一般的意味でなくとも德川時代の學者特に歴史家達はその古代研究の立場に於てそれ〴〵これに關する業績を今に殘してゐる。けれども明治以降新なる學問的方法が相ついで輸入せらるゝに及びこの分野も亦自らその局面を一變せしめられた。固より一種の國民感情はこれを以て一種の神聖冒瀆と見做しその健全なる發達をやゝ阻止した感はあるが而も大勢の趨くところは如何ともし難かつた。この點について先づ思ひ出さるゝのは故高木敏雄氏であつて廣く諸民族の神話と比較して日本神話の本質を究めその意義を明かにせんとした態度はほゞ爾後に於ける日本神話研究の方向を決定したものと云つてよかつた。かゝる先蹤に從つて歩む現代の日本神話研究家の中で今この新著を出された松本信廣氏は正しく一個の明星である。氏の立場は本書の序に「神話研究には種々なる方法あり何れも一長一短あるがその中最も重要なるは祭儀と神話とを結びつけて考察する方法であらう」といふところに明である。神話の內容は古代生活一般をその背景とし基礎として構成されてゐることは云ふまでもないがその中直接なる基礎として祭儀をとられたことはフランス學派の方法に從つたものであるとはいへその明確なる把握の下にこれを日本神話研

究に適用されたことは大なる功績といはねばならぬ。多くの祭儀の中で氏が特に重視されるのは季節祭である。本書に收められた外者欺待傳說考、豐玉姬傳說の一考察、笑ひの祭儀と神話、スサノヲノ命及び出雲の神々、我國天地開闢神話に對する一管見、蛭兒と日女、日の神の子孫の七篇はいづれもその立場に於て取扱はれ輝かしい成功を見せてゐる。そして氏の關心せらるゝ他の點はいはゞ日本神話の屬する文化系統でありその意味に於て南方大平洋神話との比較に一の重心が置かれてゐることも見逃すことは出來ない。これらの諸考察に當り氏は屢〻他の示唆を得たことを述べてゐられるがたとへそうであつたとしても氏の努力によつて百尺竿頭一歩を進められたものが多く近來の好著たるを失はない。新しき日本神話學に對する最も適當なる教科書としてこの學問に興味を有せらるゝ諸君の一讀を薦むる所以である。(四六版本文二七四頁索引二四頁、定價貳圓、東京、同文館發行)

〔肥後〕

●北畠親房　中村直勝著

嚮に『日本文化史南北朝時代』、『南朝の研究』の二篇を著はして、此の時代の錯雜極りなき時勢粧の由來する所に就いて明快なる所論を立てた著者は、最近當代の政治信仰思索考證の上に千古に消えない足跡は印した北畠親房に關して一書を草してこれに世に問はれるに至つた。

本書は著者が序文に云へる如く、別格官幣社阿部野神社の請に應じて述べられたものであり。同社の祭神たる北畠親房顯家父子の功績を、一般人士に明確に且容易に理解せしめて、五十年前この神社が創建されるに至つた動機を明らかにする目的に從つたものであるから、極めて平易に叙述されてゐるが論述されてゐる中には興味深い問題が含まれてゐる。

嘗つて史界に文化史研究が盛んになり歴史研究の對象が政治の實績の批判より人間精神の文化建設の後付けに變り、斯界の領域が一般民庶の生活に迄及ぼされるやうになつた頃から、偉人と時代との關係が盛んに論ぜられ